



# 留学OBOGは語る

## 商社マンが中国留学体験を語る

双日(株)勤務 経済学部 2008年卒 大津 清太

### 北大時代の留学先

フィリピン・セブ島(私費英語留学)  
中国・復旦大学(中国語交換留学)  
「上海留学体験記」参照(p.156)

### 留学後の現職

双日株式会社  
石炭部・トレーディング第二課

### ■私の仕事

僕は双日株式会社石炭部トレーディング第二課に配属され、現在3年8カ月が経過した。同課では豪州炭、インドネシア炭の日本向け販売を行っている。僕は最初の3年間豪州炭チームに、4年目の今年からインドネシア炭チームに所属している。

### ■留学は仕事の役に立っているか?

中国留学が実用面で仕事に結びつく事はほぼ無い。敢えて言うなら華僑と話す際「ニーハオ」から切り出せる事くらいだろうか。私が担当する豪州やインドネシアのビジネスは基本全て英語であり、中国語の出番は多くない。そもそも私の HSK6 級程度では、実務レベルの中国語はハナから身に付いていない。

では何も得るものが無かったか?と言うとそういうわけでもない。確実に得るものはあった半年間だった。一番大きな財産は(ありきたりではあるが)、日本との「違い」を知った事だ。言語、文化、政治、経済、教育、環境、気候、常識・・・様々な面での、様々な違いを見て、聞いて、感じ、違いがあると言う事を実感として認識できた。そしてそういった違いを実感した上で、異国の人間同士が通じ合うためには「言葉をうまく話す事は大事だが、とにかく何でもいいから伝える事はもっと大事だ」と思うに至った。どのように通じ合うのか、試行錯誤を繰り返した経験が今にも繋がる財産だ。

### ■何でも良いから伝える

中国語ではなく、英語の話になるが、ビジネスにおいて必ずしも皆きれいな英語を話すわけではない。各国のイングリッシュスピーカーがそれぞれに癖のある、時に未熟な英語

を話す。日本では特にそうだ。僕の部署にもネイティブスピーカーはほとんどいない。諸先輩方も、僕も、日本人イングリッシュを話して諸外国とやりとりをしている。言いたい事が通じず、恥ずかしい気持ちになる事も多々。ただ伝えなくてはならない事は伝えなくてはならない。色々な言い回しが出来ないなら、ひたすら同じ言い回しで繰り返し同じ事を言う。何でもいいから伝える。

うまく言えません、なんて言えばいいんですか、言い方がわかりません、等と言ってしまった日には課長のイカズチを喰らう。イカズチが落ちる内は良いが、最後には呆れられてしまう。話す相手が身内なら良いが、外部の商談相手であった日には、こちらの言いたい事を丁寧に解釈してはくれない。そういう相手とスマートにやれるなら良いが、やれないならやれないなりに、同じ言葉の繰り返しでも良い、目の前にいるならジェスチャーでも良い、図示してもよい、必要な事を伝え、必要な議論をし、物事を前に進めなくてはならない。当たり前の事だが、これが僕が社会人になって最も苦戦している事の一つだ。この当たり前の事が出来ず、体当たりせず、適当に流してしまった日にはイカズチを喰らうのだ。ラグーマンの課長には「ちゃんとやれ」と100万回くらい言われた。課長のラグビーを見た事は無いが、仕事の上での体当たりは尊敬に値する。

### ■体当たりの練習

「とにかく伝える」の姿勢は社会人になっても要求されている。そして僕はそれを出来ずに怒られるわけだが、今思うのは、上海留学時代に多少なりそういう練習が出来ていたな、という事だ。特に中国語は僕にはほぼ未知の言葉であり、「これはリンゴです」すら言えない状況からのスタートだった。従って上海上陸後しばらくは、そもそも体当たり以外コミュニケーションの術がなかった。またホームステイという環境下で中国の一家庭に入り、言葉の通じない人たちと生活を共にするに当たり、相互理解をし、暮らしを営む為には、とにかく思う事を伝え、相手を理解する必要があった。体当たりは簡単ではないし、自分の領域からはみ出すという意味で大きな不快感、苦痛を伴う。僕も出来る事なら体当たりせず、逃げたい。そしてそれをトレーニングするのは大変な事だ。しかし上海留学は強制的に体当たりの練習環境を与えてくれた。それが今、課長から喰らいながらも何とか頑張っていられる基礎を築いてくれたと感じる。

### ■おわりに

留学を通じて、将来に直接役立つものを学んでくる人もおり、そういう人は当に尊敬に値する。僕はというと、それは全くない。ただ一方で、実務とは関係のないメンタルの部分で得るものは大きかった。この文面で全てを伝えられるわけではないが、上記がその一例だ。今後留学を考えている後輩諸君には、是非とも自らを不快な環境に投げ、その中で悶絶をエンジョイして欲しい。その後得るものはきっと大きいと思う。僕自身も皆さんに負けないよう、今後も悶絶と成長を続けていきたいと思う。